

新発見あれこれ

奥原弘人

H. Okuhara: Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture

昨年山歩きを楽しむことが出来た。山野では珍しい物に出会う機会に恵まれる。それは稀種であったり品種にも及ばないようなものでもあり奇形でもあれば又間種とみられるものでもある。私の見たそれらを一括してここに述べてみる。ご指導いただいた京大の北村先生・村田先生、信大の清水先生、故人となられた東大の倉田先生にお礼を申し上げる。

1. 稀種 アオキラン *Epipogium japonicum* Makino は1904年日光で青木信光氏によって発見された腐生ランで本州中北部で稀に見られる珍種とされているが昨1981年10月越後に近い信濃町の山中で本会の採集会が行われた際1会員が採集したので植物誌の資料として納めた。これは全国で第5番目の採集とみられる。(採集した方はご連絡下さい)

マルバウマノスズクサ *Aristolochia contorta* Bunge は山形、新潟、島根と限られた地方に分布し本県でも佐久地方に分布が知られている。先年木曽福島町でも群生地を見つけ本誌で報告したが昨年南木曽町妻籠でも見つけた。

2. 北方系の2種 エゾナンダ *Polypodium virginianum* L. の本県における分布は島々谷が南限とみられていたが、近年大塚孝一氏は川上村や辰野町でも見ているというから、今のところ、この両地が最南とみられる。私も県西部の島々谷より南への分布に注意していて、昨年ようやく奈川村の奈川渡と大白川左岸で確認したが、これより南の分布に注意したい。

オオイタドリ *Reynoutria sachalinensis* Nakai の分布は富山・長野両県が南西限とみられ本県では明科町の汐沢が南限として確認されてきたが昨年南アルプス山中の北又沢上流で相当量の分布を見た。ここは明科町からは100km余南にあたり林道に沿って分布しているので人為的分布のようにもみられるが一応分布の事実を報告しておく。

3. 暖帯の4種 オオバノハチジョウシダ *Pteris inaequalis* Bak. var. *aequata* (Miq.) Tagawa 1975年9月越後に近い小谷村の北部で見なれないシダを見つけた。倉田先生にお願いしてオオバノハチジョウシダと分かった。この種は2mにもなる大形のシダで形にも特徴があるのに、この採品は40cmばかり

りで特徴もよく現れていなかった。この種の県内での分布を文献によって調べてみるに暖地の下伊那郡でも知られていないようで、これが県内での初採とみられた。ところが昨年10月下伊那郡でも泰阜村の万古川下流でこれを見ることが出来た。これはやや大きくて特徴も現れていたが同定には困らなかった。これで本県においても南北両端に分布していることが確認できた。もちろんこの株は残してある。

サクラバハノキ *Alnus trabeculosa* Hand. - Mazz. この種は暖帯の湿地で稀に見られる小高木で那須地方を北限とし関東以西に分布するとみられているので県内でも木曽谷や伊那谷では見られそうであり「下伊那の植物中巻」には松川町でごく稀に見られると記されている。そのほか調査文献によれば居谷里や戸隠にもあると記されているが私としては観察の不十分もあってか、それらの地でこれを確認することは出来なかった。それがようやく昨年になって木曽郡最南の山口村青野で確認することが出来た。ここはハナノキやヒトツバタゴの自生地であるが位置的にも産して当然であろう。

ウラジロマタタビ *Actinidia arguta* var. *hypoleuca* (Nakai) Kitamura この種は関東南部以西の暖帯に分布するとみられていて県内では木曽の賤母国有林にあることは前に見ているが昨年木曽福島町の城山国有林にもあることが確認された。これより北にもあるとは思われないが下伊那郡では今後見つかる可能性がある。

ミヤマウコギ *Acanthopanax trichodon* Fr. et Sav. これは関東南部、東海、近畿の各地方の暖帯に分布するとされている低木で県内での記載は見られなかったが、昨年8月天竜川支流の遠山川上流(南信濃村地区)で松田行雄氏と共にこれを確認することが出来た。そこは北向斜面の林内であった。この種は枝が細く倒伏してクモノスダの様な殖え方をするらしく、多くの株が小群をなしていた。

4. 枝垂れの2種 アカシデの枝垂れ 細長い樹枝は下垂し易いが、アカシデもその一つで、多少はそのような形をなすのが普通である。しかしここに取り上げようとするのは枝が特に長くシダレザクラのように垂れている完全な枝垂れのアカシデである。

それは木曽福島町の原正一氏の庭に植えてあるもので造林に熱心で植物に興味をもつ同氏が附近の山にあったのを移植したものという。まだ高さ1mの若木で今後の生長が楽しみである。アカシデの1品種シダレアカシデ *Carpinus laxiflora* (S. et Z.)

Blume form. *pendula* と呼ぶに問題はないと思う。

イロハモミジの枝垂れ 昨年9月下伊那郡南信濃村の梶谷でイロハモミジの見事な枝垂れを見た。4本あるうち2本は地上30cmの高さで周囲1mを越える太さがあり、所有者鎌倉昭人氏の話では近くの山にあったのを先祖が移植して殖やしたもので大きなのは樹令が100年くらいになるということであった。種類は知らなくてもモミジの枝垂れとして大切に保存してきたらしい。イロハモミジは県内でも下伊那・木曽両郡の南部では野生を多く見るが、このような見事な枝垂れは初見である。シダレイロハモミジ *Acer palmatum* Thunb. form. *pendulum* の名を呈し大切に保存することを望む。

5. アザミの間種 *C. microspicatum* × *C. purpuratum* 昨1981年8月15日、松田行雄氏と共に天竜川支流の遠山川上流を調査中、間種とみられるアザミを見つけたので、それを報告したい。先ず遠山川をさかのぼって北又渡に至るとフジアザミに混って丈の高いアザミが見つかった。次いで北又沢を0.5kmほどさかのぼると同様のものが又次々と目につき始め、後日数えたところでは40株くらいあった。

北又沢には林鉄を取り払った後の道路に沿って高さ50cm内外のフジアザミが多いが、それに混ってこの壮大なアザミが見られる。フジアザミの中にも草丈の高いものもあって岐阜県の白山山麓と奈川村の大白川では主茎が1mに近いのを見ているが、それとは違うので、これはフジアザミと何かの間種であろうと考えつつ進むと道上の林縁に沿って点点と現れたのがアズマヤマアザミであった。そこでこの両種の間種であるとの判断を下すことが出来た。

次いで9月27・28両日再びこの谷を歩いて開花中の全形を観察することが出来、翌29日にはこの南の南信濃村の梶谷でも2株を見、10月17・18両日は北又沢の川から700m高地を通っている林道沿いでも見ることが出来た。

以下このアザミの形質について述べることにする。高さは1.5～1.8mでフジアザミの3倍に達する。葉はフジアザミよりやや小さい程度と大きく、薄くて細脈が明らかであり、くも毛が少くてフジアザミほど白くない。フジアザミより中央脈が細く刺は細長く強剛でない。大きな葉はフジアザミの根出状と

異なり主茎上部まで同じように着いている。

頭花は遥かに小さく径がフジアザミの1/2程度で倒卵形である。総苞片には刺があるが多いものと少ないものとの差が大きく、花色はフジアザミと同じで上部は直角に折れ開いているが、その部の長さは極めて短い。小花の花冠は長さ11～18mmと長短の差が大きい。以上のようにフジアザミとは違っているが葉が大きく、くも毛があって白みをもつこと、総苞片の色が同じで刺のあることなどフジアザミの形質を残している。これに対しアズマヤマアザミの形質を残している点は草丈が高く、アズマヤマアザミの主茎上部につく大きな葉に似た大きな葉が上部まで着くこと、頭花が小さく、細長くて倒卵形であること、総苞片の先端が短いことなどである。

前に述べた総苞片の刺の多少と花冠の長さに大きな開きのある点は、これが間種であることの現れではないだろうか。この北又沢にはこの2種以外のアザミは見当たらないことは、この両種が両親であるという見方を有力にするものと考ええる。この地方は古来遠山地方と呼んでいたもので、この地名に因んでこれをトウヤマアザミと呼ぶこととした。

この調査には松田行雄氏と北原技術事務所の北原寿磨氏の協力を得たことを附記し、お礼を申し上げる。

6. 多弁のアカネスミレ 南安曇郡を調査中奈川村の南部で昨年5月花弁の多いアカネスミレを見つけた。7株あったアカネスミレの中の1株がこれで、花は5個ついていたが何れも花弁とがく片が多くその1花は花弁が10個でがく片は不明、がく片9個で花弁13個のもの2花、がく片10個で花弁が13個と14個のもの各1花であった。観察を続けようと現地に残してあるが、保存とともに殖やすことも考えたい。奇形と考えられるがコモロスミレにならないナガワスミレと呼ぶこととした。

7. 多花性のオオウバユリ ウバユリの分布は関東以西、オオウバユリの分布は中部地方以北とされていて県下では大体南部にウバユリ、中部以北にオオウバユリが分布している。花の数はウバユリは数個、オオウバユリは10～20個とされているが、大きさは文献により一定せず、逆の記載もみられるので、両種の区別は花数でみる方が問題がない。ところで昨年奈川村の南部で見たオオウバユリの1本は41果をつけ、落ちたらしい痕跡も2個あった。茎は極めて高かったが果実は多いかわりに小さく、上部ほど特に小さかった。これも1種の奇形とみられようか。

8. 1花のオオナルコユリ 松本市の東部山地に1

花房1花のオオナルコユリの1群のあることを数年前から見ているが、その後も木曽と下伊那で見、ハケ岳の標本でも見ている。大きさはナルコユリ程度で大きくはないが花形はオオナルコユリと同じである。環境の影響によるものかどうか注意して見ていただきたい。

9. タケシマランとツバメオモトの果形 松本市の東部山地にあるタケシマランの1群は果実が広楕円形であることに数年前に気づき注意していると北アの榑池附近でも見たが松本産は9~12×6~7mmと長く大きい。松本市の同じ所にはツバメオモトの11×8mmと広楕円形の果実をもった1群もあることを昨年になって気づいた。ナガミノ〇〇と呼ぶのはこの類か。

10. 大きなヒロハテンナンショウ 表日本に分布するスルガテンナンショウと裏日本系のヒロハテンナンショウとは南北から木曽谷の中部に及んで鉢合わせの状態となっている。木曽福島町の城山国有林にはヒロハテンナンショウの多い所があって生長したもの10株を観察したが、葉が極めて大きかった。この種の小葉は5個で、その長さは10~15cm、幅は4~7cmとされているが、この地で見たのは長さ18~26cm、幅8~13cmで標準の2倍に近い大きさをもっていた。またこの中の5株は小葉を7個もっていて葉縁が重なり合っている。小葉が5個で大きいのは戸隠でも見、志賀の標本でも見たが7小葉のものは他では見ない。これは奇形とはみられないので仮にオオヒロハテンナンショウと呼んで他所での観察を続けたい。

11. 小花のウマノアシガタ 1昨年6月岐阜県の高山市西の清美村で花の小さなウマノアシガタの1群を見つけた。道路端であったので何等かの影響による1時的な形かも知れないと思い1部を持ち帰って植えておいたところ昨年もやはり同じような花をつけた。茎はやや細く下部はほとんど無毛で上部には上向きの伏毛がある。茎葉の裂片もやや狭い。花は径11~12mm、花弁長5~6mm、集果は径4mm内外である。1品種とみたらよいか、奇形とみたらよいか。

12. 花色の変りもの6種 昨年麻績村でセキヤノアキチョウジの白花品を、白馬村でマツムシソウの白花品を見た。また麻績村と信濃村で紫色のシロヨメナの群生を見た。

アオザゼンソウは先年松田氏等によって報告されているが、私も大町市で淡黄色のもの、黄緑色で紫斑のあるものを見た。以上は既知のもの、次は如何。

シロツメクサは白で時に紅色のものも見られるが昨年松本市内で見たのは紫茶色の1群であった。

ヨモギの花は淡褐色と記載されているが初めは黄緑色である。昨年松本市の山地で見たのは紫の1群であった。

メドハギの花は黄白色で基部に紫斑のあるのが普通であるが昨年大町市で見たのは紫の部分が広く、先端の縁だけが黄白色で一見して紫色と見られる美しいものであった。

ヤマトリカブトの花は青紫色であるが昨年聖山で見たのは微かに青色をおびた白色であった。これを標本にしたところ青色に変わった。こんなのを白花とするには問題がありそうに思う。私名でシロバナとしたものの中には学名の *spodius* も含まれているようで和名ではその点不明瞭である。

13. イヌハッカは全部帰化したものか 昨年松本市で帰化植物のイヌナギナタガヤ・アメリカフウロ・ツボミオオバコ・ハイアオイを見、ヒゲナガスズメノチャヒキの大繁殖を見たが、ここは市内の河原で土木機械の置場にもなっている所であったから、これらの帰化は当然であろう。また去年は聖山の麻績村地区でイヌハッカ(チクマハッカ)の群生を見たが、これは意外と感じたので、ここに取り上げてみたい。この種は帰化植物とみられていて牧野図鑑には(朝鮮・支那・西アジア・ヨーロッパ原産で長野県北部に帰化、筑摩薄荷の意味で、筑摩は長野県の地名である)とあるが筑摩の地名は中信にあり筑摩山脈のことと聞いている。私共の調べた聖山の高地には大きな岩壁が幾つかあって、その上は山頂となり1本の細い山道が通っているが、ほとんど人通りがなく帰化植物などは全然見られない。イヌハッカのあった場所は横に長く続く高さ200mmにも達する大岩壁の直下であった。この岩壁を調べようと下から上って行ったが、耕地を離れ明るい雑木林の中の道を登って終点につくと山は急傾斜となり暗い森林となった。この林内を木につかまりながら登って岩壁下の1200m地点についた。途中の開空地にはクサソテツの大群落があり、林内ではタガソデソウ・アサマヒゴタイ・ハイイヌガヤ・キオン・コキンバイ・クロイチゴなどを見たが帰化種の全然見られない地帯が続いた。イヌハッカが帰化したものとすれば、このような所にどのようにして侵入したか理解できなかった。ツキヌキソウは長い間帰化種とみられていたようであるが、今日では在来種とみられるようになった。イヌハッカもこのような山中のものは在来種とみることはできないであろうか。参考文献 略